

# 付記：「こども食堂等に寄せられる困りごとと支援に関する調査レポート」 統計分析結果について(1)

R5年度（2023年度）に実施した県内web調査では、今後の食支援活動にとって有益と思われる示唆が得られて、本報告では重要な結果としていくつかの項目についてご紹介しています。そのうち統計的に検証し、有意な、あるいは有意傾向の結果も得られていますので、本ページに付しておきます。

## ■開催頻度と子ども・保護者の困りごとのキャッチの関連の検討

①「週1～週2日開催」「週3～4日開催」を「開催頻度高」、「月2回程度開催」を「開催頻度中」、「月1回程度開催」「数か月に1回程度開催」を「開催頻度低」とし、開催頻度と利用者の困りごとをキャッチしているか否かとの関連を検討するため、子ども、保護者それぞれの困りごとのキャッチについて $\chi^2$ 検定を行った。その結果下記の通り有意・有意傾向が認められた。

- ・開催頻度と子どもの困りごとのキャッチの有無について有意な関連がみられた。（ $\chi^2(2)=9.46$ ,  $p<.01$ , Cramer's  $V=.40$ ）
- ・開催頻度と保護者の困りごとのキャッチの有無の関連について有意な傾向が見られた。（ $\chi^2(2)=4.97$ ,  $p<.10$ , Cramer's  $V=.29$ ）

残渣分析により、開催頻度の低い団体は子ども困りごと、保護者の困りごと、それぞれについてキャッチしている団体の数が有意に少なく、開催頻度の高い団体では、子どもの困りごとをキャッチしている団体が有意に多かった。

なお、開催頻度と主催者・ボランティア等関係者の困りごとのキャッチについても、有意な関係が見られた（ $\chi^2(1)=6.77$ ,  $p<.05$ , Cramer's  $V=.34$ ）。しかし、残差分析により、開催頻度が中程度で困りごとのキャッチが低くなっており、要因等の解釈について課題がのこった。

変数	出現値	開催頻度			合計
		低	中	高	
子どもの困りごとのキャッチ	なし	△ 16	3	▼ 0	19
	あり	▼ 19	9	△ 13	41
保護者の困りごとのキャッチ	なし	△ 13	2	1	16
	あり	▼ 22	10	12	44
保護者の困りごとのキャッチ	なし	7	△ 6	1	14
	あり	28	▼ 6	12	46
(△は有意に多い、▼は有意に少ない)					

## 付記:「こども食堂等に寄せられる困りごとと支援に関する調査レポート」 統計分析結果について(2)

- ② 従属変数を利用者の困りごとのキャッチの有無、独立変数を開催頻度とし、ロジスティック回帰分析を行った。その結果下記の通り有意・有意傾向が認められた。
- ・子どもの困りごとのキャッチに対して開催頻度は正の有意な影響を与えていた (OS= 4.61,  $p < .01$ )。食支援の開催頻度が1単位上がるごとに、困りごとをキャッチするオッズが約 4.6倍 となることを示している。
  - ・保護者の困りごとのキャッチに対して開催頻度は正の有意な影響を与えていた正の有意な影響を与えていた (OS=2.71,  $p < .05$ ) 食支援の開催頻度が1単位上がるごとに、困りごとをキャッチするオッズが約 2.7倍 となることを示している。

オッズ比		目的変数 = 子どもの困りごとのキャッチ			
変数名	子どもの困りごとのキャッチ	95%下限	95%上限	VIF	
開催頻度	4.610 **	1.868	11.380	1.000	
$R^2$	.153 **				

オッズ比		目的変数 = 保護者の困りごとのキャッチ			
変数名	保護者のこまりごとのキャッチ	95%下限	95%上限	VIF	
開催頻度	2.741 *	1.029	7.299	1.000	
$R^2$	.080 *				
** $p < .01$ , * $p < .05$ , + $p < .10$					

# 付記:「こども食堂等に寄せられる困りごとと支援に関する調査レポート」 統計分析結果について(3)

## ■相談体制・相談人員の有無と保護者の困りごとのキャッチの関連の検討

①相談体制・相談人員の有無と保護者の困りごとをキャッチしているか否かとの関連を検討するため、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果下記の通り有意な傾向が認められた。

・相談体制・相談員の有無と保護者の困りごとのキャッチの有無の関連について有意な傾向が見られた。(  $\chi^2(1)=3.26, p<.10, \text{Cramer's } V=.23$ )

なお、相談体制・相談人員の有無と子ども、主催者・運営者等関係者の困りごとのキャッチにの有無についても関連を検討したが、有意な結果は得られなかった。

② 従属変数を保護者の困りごとのキャッチの有無、独立変数を相談体制・相談人員の有無とし、ロジスティック回帰分析を行った。その結果下記の通り有意傾向が認められた。

・保護者の困りごとのキャッチに対して開催頻度は正の有意な影響を与えていた(  $OR=3.02, p<.10$ ) 食支援の開催頻度が1単位上がるごとに、困りごとをキャッチするオッズが約 3 倍となる可能性が示唆されている。

オッズ比	目的変数 = 保護者の困りごとのキャッチ				
変数名	保護者の困りごとのキャッチ	95%下限	95%上限	VIF	
相談体制・人員	3.025 +	0.884	10.345	1.000	
$R^2$	.044 +				
** $p < .01, * p < .05, + p < .10$					

# 付記:「こども食堂等に寄せられる困りごとと支援に関する調査レポート」 統計分析結果について(4)

## ■開催頻度とキャッチしている困りごとの種類数との関連の検討

開催頻度によってキャッチしている困りごとの種類数の平均が異なるかを検討するため、分散分析によって検討することにした。一要因の分散分析の結果、1%水準で有意な差が得られた ( $F(2)=7.523$ ,  $p<.01$ )。そこでHolm法で多重比較を行ったところ、開催頻度の低い団体と開催頻度の高い団体の間に1%水準で有意な差が得られた。

		開催頻度		
		低	中	高
キャッチしている	平均値	2.765	4.250	6.643
困りごとの種類数	標準誤差	0.542	0.913	0.845

## ■開催頻度とヤングケアラーの気づきとの関連の検討

気づいたことのある困りごとについての質問の中に、「子ども・若者からの家族のケア・家事に関する相談(ヤングケアラー)」という選択肢を設けた。そこで、開催頻度とヤングケアラーの気づきとの関連を検討するため、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、開催頻度とヤングケアラーの気づきに有意な関連がみられた。 ( $\chi^2(2)=15.392$ ,  $p<.01$ , Cramer's  $V=.506$ )

		開催頻度			
		低	中	高	合計
ヤングケアラーへの気づき	なし	△ 33	8	▼ 7	48
	あり	▼ 1	4	△ 7	12

残渣分析により、開催頻度の低い団体においてはヤングケアラーに気づいている団体はほとんどないが、開催頻度が高い団体においては気づいている団体があることが示された。

※本分析にはフリーの統計分析用プログラムHADを使用させていただきました。提供者の清水裕士氏に感謝申し上げます。